一章　リストラ

俺は今なんでこんなところにいるんだ――。

それが率直な感想だった。

まともに仕事をして営業成績もそれなりに伸ばしているはずだった。だが、会社をクビになった。その衝撃的な事実を妻の早紀（さき）に報告しなければならなくなったのだ。

早い話が不況で、社員を減らさなければならない。その煽りを俺は喰らったのだった。あんなに頑張ったのに……。もう何もかも信じられない気

持ちだった。

俺のせいじゃない。そんなネガティブな気持ちが正直あった。

会社をクビになったと言った途端、妻の顔色が変わった。いつもは穏やかでニコニコして俺を迎えてくれたのに、今ではそれがない。仏頂面の妻を見るたびに俺は胃が痛くなる思いだった。

たしかに俺が仕事を失くして不安なのは解かる。だがリストラされた俺だって、正直凹んでいるのだ。その気持ちに寄り添い、もう少し汲んでくれてもいいのではないかと思った。妻なのだから。

なんでこんなことになってしまったのだろう。入社して五年目で営業活動を続けていた。会社から責められる成績ではないはずだ。それなのにリストラの対象になるなんて思ってもみなかった。その通告を受けたとき、俺は人事に食ってかかった。だが一旦決定した事項が覆ることはなかった。

翌日から俺は無職になった。早紀からは「二、三日ゆっくりしてもいいけど、それ以降は仕事探してね」と念を押された。落ち込んだ俺もそのつもりだった。百も承知だ。

だが実際にハローワークに行っても、いい仕事はなく、俯いて帰ることが多くなっていた。そこへ行けば簡単に仕事が見つかると思っていたが、そんな甘いものではなかった。来る日も来る日も職が見つからず、気持ちは沈むばかりだった。気は焦るばかりだ。早紀の視線が冷たく突き刺さり、家にいても針の筵だった。幸いまだ子供はいなかったので、それだけは唯一の救いだった。

そして妻の早紀もしっかりと仕事を持っていた。彼女は化粧品会社の部長の椅子に座り、いつも輝いていた。今の俺とは雲泥の差だ。それなりに給料はもらっていて、俺がクビになっても、すぐに生活に困るわけではな

い。だが旦那が職に就かず、一日中ぶらぶら遊んでいることには我慢ができないようだった。

妻の立場としてみれば、自分の夫にそんな情けない生活をしてほしくないのだろう。自分の稼ぎに甘んじて欲しくない、そういう思いが強いようだった。肉体労働でもなんでもいい、もっと自信を持って生きていて欲しい。収入のことは二の次で、とにかくちゃんと働いて欲しいという考えの女だったのだ。

その気持ちは俺にも理解できた。できれば俺だってそうしたいし、そのつもりだった。今まではちゃんと働いていたので、妻の機嫌が悪くなることもなく、毎日笑顔で暮らしていたが、俺がリストラに遭ってから彼女は人が変わってしまった。